

# 学報

愛知県立芸術大学 学報

No. 67

## 戸山俊樹

学長就任記念インタビュー  
愛知県立芸術大学学長





戸山 俊樹 とやま・とき(本学学長)

声楽家  
香川県坂出市出身。東京藝術大学大学院音楽研究科修了。日本音楽コンクール第2位、海外派遣音楽コンクール松下賞、ジュネーヴ国際音楽コンクールブロンズメダル、ジローオペラ賞受賞。1984～88年ドイツハーゲン市立歌劇場専属契約歌手。1990年愛知県立芸術大学音楽学部専任講師。1995年助教授、2003年教授、2009年音楽学部長・大学院音楽研究科長、2013年副学長、2019年第11代学長に就任。

## 学長就任記念インタビュー

# 戸山俊樹 学長

2013年から副学長を務められている戸山俊樹先生が、このたび新学長に就任されました。

オペラ声楽家の道をめざされたきつかけやドイツ・ハーゲン劇場で活躍された頃の思い出をはじめ、音楽への情熱や舞台でのエピソード、本学や学生に対する思いなど、戸山学長の明るく温かいお人柄に触れながら多彩なお話を伺いました。(取材・文 小山芳恵)

### 大学進学の際に音楽の道を選択

——まずは戸山学長が音楽を始められたきっかけをお聞かせください。

幼稚園の頃にオルガン、小学3年生までは姉と一緒にピアノを習っていましたが、4年生からは草野球が面白くなり、ピアノをやめてしまいました。高校では弓道部に所属していましたが、コーラス部がコンクールに出場する際に「男性部員がいらないから」と音楽の先生に誘われましてね。その後先生に「声が良いから音楽やってみないか」といわれたのもきっかけのひとつだと思います。高校3年の夏休み直前に、音楽の道へ進むことに決めました。いわゆる受験逃避というものです(笑)。進学校だったので、みんなは休み時間に参考書を開いていましたが、私は音楽室でピアノを弾いていました。

——もともと音楽は好きだったのですか。歌は好きでした。特にフォークソング世代で

高校3年で音楽の道へ進むと決めた時に「将来はドイツのオペラハウスで歌う」とすぐに大目標を掲げたのです。大学には学部生として4年、その後はできるだけ勉強できる環境に身を置きたいと思って院生として3年在籍しました。学内のオーディションや試験も頑張りました。大学院3年のときに日本音楽コンクールにチャレンジして2位になり、続けて海外派遣コンクールにも入賞し、翌年渡欧。ジュネーブ国際音楽コンクールに出場し、残念ながらファイナルには残れなかったのですが、ブロンズメダルをいただきました。28歳の時です。

——その後、ドイツへ行かれたのでしょうか。そうですね。そのままミュンヘンに行きました。恩師にミュンヘンのブラシユケ先生を紹介していただき、「ドイツに行くなら一度会っていらっしやい」といわれ、「二度レッスンをお願いしたい」と先生に連絡を取ったら「すぐにいらっしやい」といついていただいて。自宅を訪ね、その場で歌いました。恩師に「ちょうどその時期はオペラハウスのオーディションをやっているから、受けてくるといいよ」ともいわれていたの、ブラシユケ先生に「ドイツで働きたい」と話したところ「わかった」といわれ、すぐにグランドピアノの上に電話機を置き、誰かに電話されたのです。電話の相手は、いわゆる私達のようなオペラ歌手を目指す者を劇場に手配することを専門とするマネージャーでした。私は先生に、受話器に向かって歌うようにいわれたので、精一杯歌いました。そのおかげで約10日後に行われるというオーディションを受けられることになり、先生がレッスンしてくださった上にマネージャーの元まで連れて行ってくださったのです。ドラマティックですよ。

井上陽水や吉田拓郎など、ラジオの深夜放送でよく聴いていました。

——それで東京藝術大学へ進学されました。3浪しました(笑)。ピアノや弦楽器は幼少期から始めないと音大は難しいのですが、歌や管楽器は中高からでも間に合います。それでも入学した当初は大変でした。浪人時代は国立音楽大学のそばに下宿していたのですが、同じ下宿の国立音大生と仲良くなって「創作オペラの会」というクラブ活動に参加していました(笑)。楽しかったですね。顧問の先生も学生たちも僕が正規生ではないのにすごくよくしてくれて、今でもその頃の仲間たちとは時々会います。この時に、人前で歌うということに慣れたのだと思います。

### ドイツ・ハーゲン劇場でオペラのバスとして活躍

——オペラは以前から興味があったのですか。実はオペラについて知識がなかったのですが、

——本当にドラマのようです。オーディションは緊張されましたか？

マネージャーの元には私のように歌手をめざす若者が多く集まり、1人ずつ部屋に通されて歌いました。マネージャーはシビアで、最初はこちらを見てくれませんが、歌や声に興味を持つと顔を上げてこちらを見てくれるのです。私は気に入られて、現在、本学出身のオペラ歌手辻井亜季穂さんが活躍されているヴェルツブルク歌劇場と、ハーゲン市立歌劇場の2つの劇場でのオーディションを紹介されました。どちらも、来シーズンからのバス歌手の1席をめぐって若者からおじさんまで歌手が集まってきたり、舞台の上で1人ずつ歌われ、その場ですぐに合否が決まってきましたね。私は幸運にもどちらも合格し、大学の恩師に相談して、ヴェルツブルクより条件がよかったハーゲン市立歌劇場に決めたのです。まったく1日で人生が決まってしまうんですよ。

ドイツでは大学の肩書など関係ありません。「何が歌えるのか、どう歌えるか」だけです。しかも欧米人に比べて容姿が違い、体格も小さい日本人はそれだけで試験を強いられます。いくら衣装をつけて「スペインの王だ」と意気揚々舞台上があつても、違和感がありますよね(笑)。最終的に東洋人であることを観客に忘れさせるほどの魅力がないとダメなのです。本学の卒業生でオペラ歌手として活躍している人たちもみんなそうやって厳しい道乗り越えてきた人たちばかりです。

——劇場での日々はハードでしたか？ オペラだけではなくオーケストラの定期演奏会のソロなどもあり、1年間で120回以上歌った年もありました。少ない年でも70数回は



歌いましたね。私がいたところは小さな劇場で、専属のバス歌手は3人しかいません。オペラではどんな小さな役でもバスは必要で、とにかく過酷でした。その後3年目にワーグナーの「ローエングリン」のハイリッヒ王役をいただきましたが、とてもドラマティックな役どころで、声に負担もかかり、相当疲れてしまつて。周囲にもそれが伝わつたのでしよう。4年で契約打ち切りとなりました。

——声が疲れてしまったことが原因ですか？

はい。が、大学で7年間勉強しても基礎的な技術が足りなかつたのだとも思います。普通、学生は大学を卒業すると留学し、そこでさらに数年間技術や劇場のシステム、また言葉の壁を乗り越えて挑戦をしていくのですが、私はそこを飛ばしてチャレンジしてしまつたのです。技術があれば、声帯に負担をかけない歌い方ができますが、その頃は若かつたので力まかせに歌つて、結果として疲れてしまつたのです。月の半分以上オペラをコンスタントに歌い続けるには、やはり技術がないと無理です。パワーだけで乗り切る歌い方は、学生には経験してほしくないですね。きちんと勉強して技術を磨いてから挑戦してほしいと思います。

——そういう意味では、私自身は、若かつた頃より今の方が技術的にも表現的にも引出しが増えたので楽しいです。10年前までは毎年1回、日生劇場に呼ばれてオペラを歌つていました。今は大学の仕事が忙しく、なかなか舞台上立つ機会がなくなつてしまいました。

——舞台に立つ時はどんな気持ちでいらつたのですか？

芝居をするのは好きですが、歌うことは体を使って自分の声で表現することなので、すべてを磨っていくことは大切です。

紐で股関節をしっかりと縛つて歩くと、足の内側に力が入り歩きやすくなります。体のバランスも取れて歌いやすくなりますね。

トレーニングをして、体がついているセンサーを磨いていくことは重要です。若い頃はパワーヒッターに憧れることも多いでしょうが、それを年をとつても継続していくことは難しい。やはり、自分の体と楽器を知り、その上で、技術を高めていくことは大切です。

## 自然から受ける恩恵が 芸術や美術の感性を磨く

てさらけ出す感じがあり、正直言つて恥ずかしさはありません。でも舞台に出る時はスイッチを切り替えて集中し、恥ずかしさは見せません。でも舞台が終わつた後、決して自分の録画や写真は見たくないです(笑)。

——舞台がお好きなのですか？

集中することが好きなのだと思います。昔から集中力はあるタイプなので、舞台上立つて演じたり歌う、そのエネルギーの使い方が自分にとつてハッピーなのだと思います。苦労しても、もう一度やつてみたい、それが音楽の麻薬的な部分ではないでしょうか。

特にオペラは自分と全く違うタイプの人間を演じ、歌うことが魅力です。例えば悪役を演じる時は「この人はどういうタイプでなぜこういうことをするのか？どんな環境で育つた人間なのか？」と考えるような作業が好きで、その考えを舞台の稽古で試していくのも好きです。いろいろな役を経験し、お客さまに喜んでもらえるのも楽しいです。悪役を演じた後にお客さまから「とても憎たらしかった」といわれると、最高の褒め言葉だと実感しますね。

——舞台の面白さはどんなところでしょうか？

客席の空気感というのでしょうか。「あ、今日はお客さまが集中してくれているな」とか「ノリがよくて温かいな」と感じることはあります。これには相乗効果があつて、客席が盛り上がりれば我々もよりよく演じられる。つまり全く同じ芝居をしても1回として同じものになつたことはないのです。技術があつてうまくいったとしても、回を重ねる度に違う課題が見え、際限がないところが芸術の面白いところです。また、芸術家はまだどこが自分の人生の頂点なのかわからないので、常に頂点をめざします。

——本学に赴任されたきっかけを教えてください。

本学関係者から、ヨーロッパのオペラハウスで歌つたことがある経験を活かしてみないかと誘われました。その時「自分の風は今度日本に吹いている」と感じ、日本へ戻つたのです。その決断は早かつたですね。自分が求められている場所が本能的にわかつたのかもしれないですね。

藤が丘駅からタクシーに乗り、本学キャンパスに入ったとたん、ドイツに似た豊かな緑に魅せられて「ここはいい」と直感しました。もしも日本に戻つてきたら、緑の多いところで働きたいと思つていましたから。



てベターな状態にしていきたいと心がけています。芸術家と教員の二足のわらじを履いている大学教員はそこが難しいところです。常に頂点をめざしていかなければならないプレッシャーとしてだめになつてしまふ。そういう意味では、本学の先生方は皆さん本当によく頑張つていらつたと思います。

## 発声の技術習得のために 心と体のバランスを重視

——戸山学長は発声のために独特のトレーニングをしていらつたのでしょうか？

バランスボードのことでしょうか。発声の技術習得のために大切なことは、体の脱力、つまりリラクセスです。「本当にリラクセスした状態とはどんな状態なのでしょう？」と追求するうちにバランスボードを知りました。最初は

——自然がお好きなのですか？

無意識のうちに、自然に癒やされています。私の趣味は散歩なのですが、今も時間がある東山の1万歩コースを歩いています。歩いている時は仕事のことや音楽のこと、人生についてなどいろいろなことを考えていますが、ふと空を見上げたり自然の美しさに癒やされる。そういう時間が好きで、大切に思っています。

自然の中を歩いた後は、心地よい疲労に包まれ、心と体が健全になります。自然から受けるインスピレーションは芸術家にとつても大切です。

——そういう意味では、本学の環境はすばらしいですね。私が赴任したばかりのころは、農業試験場へ続く森の道がありました。深まる秋の中、聞こえてくるのは風に揺れる葉擦れの音や鳥のさえずりだけ。枯れ葉の絨毯をサクサクと踏みしめながら歩くような時間は、人間にとつて必要な時間なのではないでしょうか。それがなかなか持てない現代は、息苦しい時代でもあります。この息苦しさを打開するのが本学の役割では、と感じています。みんなに面白がつてもらえる大学でありたいと思いますね。

## 音楽や芸術の楽しさを 人々へ広めていける大学へ

——戸山学長が感じる、愛知芸大の魅力を教えてください。

まず芸術大学で音楽と美術が一緒になつている、いわゆる公立の総合芸術大学というのは全国的にも数少なく貴重だと思います。音楽家と美術家が同じ空間にいて、多様な刺激を与えあえる。

丸太と板で作つて乗つて(笑)、体というのは面白いので、力を抜くと勝手にバランスを取り始めます。脳が反応するのでしようね。リラクセスした状態でバランスボードに乗りながら声を出す、ゆつたりとした呼吸でとてものびやかに声が出せます。反対に、演奏が技術的に難しい箇所では体が緊張して不必要な力が入り、バランスボードに立つていられなくなります。学生の指導にも時々バランスボードを取り入れて、脱力することの大切さを教えてください。

——発声の練習だけではなく、ストレス解消にもよさそうですね。

そうですね。バランスボードに乗っていると頭の中が空っぽになり、例えば、会議でもめ事などがどうでもよくなります(笑)。心と体の関係は密接で、そのバランスは、とても大切です。

すでに学生たちはクラブ活動やオペラ分野で協働を行つていますが、教員ではまだまだ少ない。もつと教員自身が面白がつてオープンに刺激しあえる場を作つていけたらいいと思います。とにかく自分たちが楽しくないといけないし、自発的に行わないといけません。いつも「個」であつてもいいと思いますが、ある瞬間はコラボし、時には爆発してもいい。地域の人たちにも、こうした面白さを楽しんでもらえるといいですね。

音楽でも美術でも、いい演奏や作品は大きなエネルギーを与えられます。仕事ですごく疲れていても、たまたま行つたコンサートの後、元気になつた経験はありませんか？できるだけそういう機会を作りたいし、学生にもそういう経験を積んでもらいたいと思つています。今はインターネットが発達し、動画もたくさんあふれていますが、生の音楽や芸術はもつともつと面白いことを広く伝えていきたいですね。

——そこで大切なことはなんですか？

自然体であることの大切さです。自分が構えると相手も構えてしまふ。ステージでも自分が緊張するとそれがお客さまにも伝わつてしまいます。音楽には癒やしの力がある。私自身も音楽で救われたことが何度もあります。それを自然に伝えることが大切です。

——ありがとございます。最後に、学長としての抱負をお聞かせください。

愛知県立芸術大学を面白がつてもらえるようにしたい。そういう意味で人の心や精神にエネルギーを与えられるような大学にしていきたいと思つています。

——ありがとございました。

## 電子音楽への挑戦とヴァイオリンの可能性

大学院音楽研究科(博士前期課程)音楽専攻 弦楽器領域 2005年度修了

**山根 星子** やまね・ほしこ



ヴァイオリニスト、作曲家。2006年よりドイツ・ベルリン在住。1967年に結成されたドイツのプロGRESSIV・ロック/シンセサイザー音楽グループ、タンジェリンドリーム(Tangerine Dream)の現メンバーで、エレキヴァイオリンを担当。フランスの歌手ジェーン・バーキン(Jane Birkin)のヨーロッパツアーに参加するなど演奏家として幅広く活動する他、映画音楽や舞台作品へ楽曲提供するなど、作曲家として作品も発表している。

愛知芸大を初めて訪れた時、とても広いキャンパスに芝生が広がり美術学部の学生が写生をしていました。そして私は「この大学なら自由に色々な事に挑戦できる」と思い、進学を決めました。音楽の道を志すにあたり、私は常に音楽以外のものにも目を向けるよう意識してきました。在学中は芸術祭実行委員になり、ラグビー部にマネージャーとして加入し、その他ありとあらゆる自主企画にも参加し、普段授業では関わりの少ない美術学部にもたくさんの友人ができました。そして様々な専攻の学生、OB達と意見を交わし合った時間はとても貴重なものになりました。正直私は全くヴァイオリン科の学生としては優秀ではなく、いつも何か違う事をしている変わった学生でした。そんな私が大学院に進学したいと当時の指導教官であった岡山先生に申し出た時は、驚かれたことと思います。

大学院修了後すぐにベルリンへ渡りロストック音楽大学で勉強しましたが、その一方で常に色々なものに興味がある私は、クラブミュージック、即興音楽、コンテン

ポラリーダンスの舞台作品など、様々な新しい世界に出会いました。そしてオーケストラで研修生として働く傍らで、ミュージシャン達とセッションなどしている頃、タンジェリンドリームのメンバーの一人と出会い、バンドに加入する誘いを受けました。タンジェリンドリームは1967年に西ドイツで結成されたグループで、これまで数々の映画音楽を手がけ、当時では前衛的であった電子音楽のパイオニアとして現在でも世界中に多くのファンを持つバンドです。そのバンドの創始者である故エドガーフローゼ氏に初めて会った時、私はヴァイオリニストとして一人のミュージシャンになる覚悟を決めました。

2011年の加入以来ヨーロッパ

ツアー、北米ツアー、オーストラリアツアーなどに参加し、電子音楽とエレキヴァイオリンで演奏する事を学びました。創始者のフローゼ氏亡き後も、残されたメンバーで音楽を引き継ぎ、世界中で演奏しています。また2011~2013年に参加したフランスの歌手・女優のジェーン・バーキンさんのヨーロッパツアーも経て、演奏家として数々の経験を積んできた現在は自身の作品の作曲も手掛けています。大学で学んだクラシック音楽も、現在タンジェリンドリームで演奏している電子音楽も、私にとって違いはありません。常にヴァイオリンの可能性を追求し、学生時代から今までに得た全ての経験が私の音楽を作り上げています。



1 電子音楽の中での即興演奏、2014年ニューヨーク公演  
2 エレキヴァイオリンでの演奏、2018年ハンブルク公演



©Katja Ruge(Live in Hamburg 2018)

## 音楽、美術、国籍、時代…境界のない、様々なものが共生しあうパフォーマンスを届ける

### BreakingBorders



2019年4月結成。音楽家や美術家など芸術家のグループであり、様々なものの境界をなくし、それらが共生し合う新しいパフォーマンスを行っている。音楽・美術・舞・物語などの様々なジャンルと一緒に新しい舞台を作る。来場者と音楽家の境界を壊してしまう参加型の演奏を行うなどの活動を通し、境界のないパフォーマンスを通して、「自分も何だってできる」というメッセージを伝えている。

シュタイナー・ソフィー 音楽研究科 博士前期課程 弦楽器領域 特別聴講学生 / 篠崎 由佳 美術研究科 博士前期課程 油画・版画領域 1年 / 中村 咲希 音楽学部 作曲専攻 作曲コース 4年 / 長谷部 りさ 音楽研究科 博士前期課程 弦楽器領域 1年 / 武市 莉佳 音楽研究科 博士前期課程 弦楽器領域 1年 / 山内 佑太 音楽研究科 博士前期課程 弦楽器領域 2年 / 本間 ちひろ 音楽学部 器楽専攻 弦楽器コース 4年 / 稲田 悠佑 音楽学部 器楽専攻 弦楽器コース 3年 / 野本 淳之亮 音楽学部 器楽専攻 管打楽器コース 3年 / 荏野 優大 音楽学部 器楽専攻 管打楽器コース 3年 / 伊原 彩夏 音楽学部 器楽専攻 ピアノコース 3年 / 北代 明音 音楽学部 声楽専攻 3年 / 今井 飛鳥 音楽学部 声楽専攻 1年 / 長富 将士 音楽研究科 博士前期課程 声楽領域 2年 / 大内 美沙季 美術学部 油画専攻 4年

「びちゃっ、びちゃっ、」コンサートホールの舞台上、画家の女の子、「しのちゃん」が絵を描いています。水彩絵の具を紙の上で弾ませたり、滑らせたり。すると、その絵を描く様子に合わせるように、何やら声が聞こえてきます。「びちゃっ、びちゃっ、ぼたっ…ぼた。」という、人の声。その声はどんとと声色を変え、様々な音響で、しのちゃんの感情や、しのちゃんに起こる出来事をも描写していきます。

これは、「BreakingBorders第2回公演 ー音楽×美術×舞×ある女の子の一生ー 常識外れの新感覚コンサート」の始まりの場面です。「BreakingBorders」とは、グループ名であり、私たちのプロジェクトシリーズのコンセプトでもあります。意味は、「境界を壊す」です。BreakingBordersは、様々なものの境界線を無くし、音楽・美術・物語・身体表現のような異なるジャンルのものを混ぜ合わせ、一つの舞台を作っています。

BreakingBordersは、オーストラリアからの留学生であるシュタイ

ナー・ソフィー(以下ソフィー)・美術の篠崎由佳(以下篠崎)・作曲の中村咲希の3人により、2019年4月に、「音楽も美術も、他のジャンルも、一緒になって作品を作りたい」という雑談をきっかけに結成され、2ヶ月後の6月2日には、第1回公演を「Cafe&Gallery Colline de Tara」にて行い、あっという間に長久手市文化の家での第2回公演の開催も決定し、メンバーも増えました。

しかし、新しいコンサートを作るまでの道のりは、困難の連続でした。新しい挑戦であるがゆえに、コンサートの内容が中々決まらなかったり、いつも引っ張ってくれていたソフィーがノルウェーへ移住してしまったり…。

そして、コンサートの世界観を演出するために照明や美術などが必要になり、私たちは、クラウドファンディングに挑戦することを決めました。しかし状況は非常に苦しく、中々支援は集まらず、集客も非常に厳しい日々が続きました。それでも皆で友人や知人に声をかけ、

宣伝やお願いを繰り返す中で、少しずつ、支援してくださる方が増えていきました。そしてクラウドファンディングが終了。最終的には、56人の皆様から、なんと28万円もの支援をいただくことができました。

そして本番。メンバーが着用した衣装は、冒頭の女の子、「しのちゃん」役も担当した、篠崎が制作しました。素材は和紙で、メンバーの個性に合わせたデザインが描かれ、とても暖かな色彩が舞台を満たし、また、場面にに応じて変わる照明は、世界観を演出しました。

「即興演奏「感情」と題したプログラムでは、少女だったしのちゃんが様々な出来事を経験し、様々な感情を味わいながら人生を歩み、最後はおばあさんになるという物語を篠崎が身体表現で表し、音楽家はその感情、物語の流れや篠崎の体の動きから、即興演奏を行いました。悲しみや怒り、全てを乗り越えた彼女を暖かな歌声が包み込み、曲が終了すると、優しい拍手が会場を包み込みました。

本公演には、約100名のお客様が来場し、とても嬉しい反響をいただきました。ある男の子は、アンケートに「なんとも言えない。すごくいい。」と書いてくれました。

第3回公演は、同年12月25日、第1回同様「Cafe&Gallery Colline de Tara」にてクリスマスコンサートを行いました。音楽とお話、そしてコンサートの前にお客様とともに手作りしたオリジナルランプとともに、暖かなクリスマスの時間を過ごしました。

BreakingBordersはこれから、舞台を世界に広げていきます。2020年11月には、ドイツ・リュエックでコンサートを開催する予定です。

私たちは、あらゆる境界をなくし、様々なものが共生し、通い合うような作品を届けること、そしてそれにより、私たちの、そしてお客様の心の中にある様々な境界を無くすことを目指しています。

文:中村咲希(音楽学部作曲専攻作曲コース4年)



コンサートの様子



BreakingBordersの活動予定は、FacebookやTwitterでお知らせしています。また、第1回、第2回公演の一部の映像は、BreakingBordersのYouTubeチャンネルにて公開しておりますので、是非チェックしてみてください。



美術学部美術科彫刻専攻  
**土屋公雄** つちや きみお

平成20年の着任以来、敬愛する建築家吉村順三設計による緑豊かなキャンパスで過ごせたことはとても幸せなことでした。すでに完成から50余年が経ち、二部建物の老朽化は歪めないものの、この自然豊かな風景の中に建築が融和し

たキャンパスは、芸術教育を享受するうえでまさに理想的環境です。吉村氏がこの丘の上のキャンパスに込められた建築家としてのロマンは、在任中じつくりと体感させていただきました。さらに特別の場所として美術学部棟2階屋

上テラスは、三重の山々をシルエットに眺める夕焼けの絶景スポットであり、僕のとっておきの場所となりました。氏もきつこの夕焼けをご覧になりながらキャンパス構想をされたのでしょうか。退任後は自分の時間も取り戻せそうです。今しばらく柏のアトリエにて初心にかえり作品制作に打ち込みたいと考えております。



音楽学部音楽科声楽専攻  
**末吉利行** すえよし としゆき

就任してから21年の歳月が過ぎました。突然、演奏家の立場から大学教員となり、戸惑うことばかりでしたが、優しい先輩と素晴らしい後輩との出会いから多くを学ばせていただきました。とても深く感謝しております。私の教員生活は、学生とオペラが中心でした。就任3年目に与え

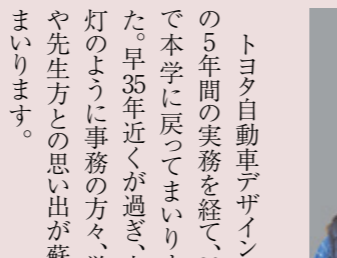
られた大学オペラ制作責任者の役を18年間続けてきました。当初、予算のないオペラ公演はデザイン専攻教員と学生での手弁当舞台制作でしたが、法人化とともに予算化され、2公演から3公演となり、今では両学部が協力して作りあげる大学の最重要プロジェクトに位置づけられまし

た。そして、2016年、制作責任者とキャストとして参加した、愛知県芸術劇場大ホールでの創立50周年記念オペラ公演、「G-PUNCH」作曲「ラポエーム」の成功は、一生記憶に残ることでしょう。とても充実した21年間でした。本当にありがとうございました。たった二つ心残りがあります。それは、かわいい学生たちの成長にかかわれなくなり、それを間近で見られないことです。彼らが音楽、芸術を自分なりに極め、人生に欠かすことのできないものにしてくれることを、心から願っております。

20年間作家として暮らした英国から帰国して間もない2002年10月に助教として赴任しました。浦島太郎の私をやさしく受け入れてくださった教員、学生、職員の皆様には今も感謝しています。東京の自宅と県芸教員寮の間を毎週往復する17年半

でした。赴任当時は藤が丘から1時間に1本のバスしかなく、車を運転しない私には藤が丘さえも遠い街でした。おかげで満月の光のありがたみを知ったり、学生とのバーベキュー等、キャンパス暮らしならではの楽しみも味わいました。

私自身は彫刻家なので、学生たちが3次元の世界を肌で実感し真の観察力を身につけて欲しいとの思いで講座を組んでいました。期待を超える傑作も多数生まれました。母校のセントラル・セント・マーティンズ美術大学と国際交流ができたこと、同学の先生が耐震工事前に吉村順三設計のキャンパスの原風景を映画作品として残してくれたことが、私から愛知芸大へのお礼となりました。



美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻  
**中島聡** なかし まさとし

トヨタ自動車デザイン部での5年間の実務を経て、30歳で本学に戻ってまいりました。早35年近くが過ぎ、走馬灯のように事務の方々、学生や先生方との思い出が蘇ってまいります。



美術学部美術科油画専攻  
**寺内曜子** てらうち てるこ

20年間作家として暮らした英国から帰国して間もない2002年10月に助教として赴任しました。浦島太郎の私をやさしく受け入れてくださった教員、学生、職員の皆様には今も感謝しています。東京の自宅と県芸教員寮の間を毎週往復する17年半

でした。赴任当時は藤が丘から1時間に1本のバスしかなく、車を運転しない私には藤が丘さえも遠い街でした。おかげで満月の光のありがたみを知ったり、学生とのバーベキュー等、キャンパス暮らしならではの楽しみも味わいました。



美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻  
**中島聡** なかし まさとし

トヨタ自動車デザイン部での5年間の実務を経て、30歳で本学に戻ってまいりました。早35年近くが過ぎ、走馬灯のように事務の方々、学生や先生方との思い出が蘇ってまいります。

インハウスクリエイティブでブランディングを中心に20年間、デザインに関わってきました。企業人から着任した私には、新鮮な眼差しで、愛知県立芸術大学の自然に恵まれた創作環境に日々、魅せられております。また、デジタルネ

イティブといわれている新しい価値観を持つ学生達からは、自らの豊かな発想力や芸術の力で、世の中を変えていくことを本気で望んでいるように感じられます。私がデザインを学び、社会人として活動を開始したころよ

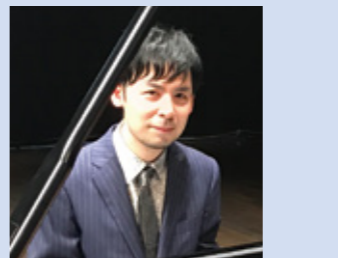
り現在までの間、クリエイターを取り巻く状況は様変わりしました。ビジネスモデルや業界構造の再編成が急速に進み、過去からの持続的な方法論では対応しかねる不確実な社会において、まさに芸術の思考が求められていることを実感しております。学生の個性を育み、若き秀でた才能が、未来の価値を正しく、そして美しく描き、芸術の力で社会をより良い方向に導いていくことができるように務めてまいります。



美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻  
**春田登紀雄** はるた ときお

2019年4月にピアノコースに着任致しました。私は幼少よりピアノを学び、東京芸術大学やドイツにて研鑽を重ねてきましたが、古今東西の素晴らしい作品や演奏の数々に触れることで、心と精神が豊かで自由なとても充実

した時間をこれまで過ごすごうことができました。このかけがえない芸術音楽の世界を、今後も自分なりに全力で追求し続けていくこと、また、勉強中の若い後進の方々に力の限りお伝えしていくこと、それにより、音楽文化と



音楽学部音楽科器楽専攻ピアノコース  
**武内俊之** たけうち としゆき

社会の発展に微力ながら貢献していくことが、私の夢です。そのためには国内で数々の優れた環境が揃っていて、大変わくわくしています。学生の皆さんには素直な向上心と豊かな可能性を備えた真面目な努力家がたくさんいらっちゃって、感銘を受けました。共に学び、大きく成長していけることを心から願っています！



美術学部美術科彫刻専攻  
**中谷聡** なかや さとし

平成31年4月より彫刻専攻教員を拝命いたしました。10年程前に本学大学院博士前期課程美術研究科を修了し、石彫を中心に創作活動を続けてまいりました。この度、母校での後進の指導を仰せつかり、この上ない喜びと、身の引き締まる思いでいっぱいです。

私が本学で学生生活を送っていた頃の長久手は、まだ、リニモの車窓から古戦場の周りに田んぼや畑が見渡せ、大きな商業施設もなく、瀬戸の山々に続く自然豊かな丘陵地帯の町でした。毎日登る芸大坂の上に、突然現れる講義棟の姿が、まるで今、地球に降り立ったばかりの宇宙船のよう

に見え、正にここは私にとって別世界の楽園でした。わずか10年の間に町の姿は大きく変わり、人口も増え、町は市になつていましたが、芸大坂を登る学生たちの芸術を希求する姿は、開学の当時から今も変わることなく脈々と続いていることを日々感じています。真っ赤に燃えながら西に傾く大きな夕日を今日も眺めながら、私も学生たちとともに、この地で芸術に関われる幸せに感謝しながら頑張っていこうと思います。



美術学部デザイン・工芸科陶磁専攻  
**小枝真人** さえた まこと

私は本学美術学部陶磁専攻の出身で、学部3年次以来、大学院、瀬戸染付研究所、現在の静岡県伊東市での作陶に至るまで、主に白磁に青色で表現をする「染付」の研究に取り組んできました。



愛知芸大での師からの教えは、日々自然の中に身を置き

きそこから学び表現するということでした。今でもこの教えは私の創作活動の礎となっています。着任して1年が経とうとしておりますが、日々真剣に陶芸に向き合い、窯から出てきた自分の作品に喜怒哀楽様々な感情を表す学生から沢山の刺激を貰い、この道に入った時の初心を思い出させて貰っています。この素晴らしい環境の中、日々学生達と刺激しあい、お互いに成長していける場を作っていくたいと考えております。



2019年度の本学大学オペラは、モーツァルト18歳の時の意欲作「へいつわりの女庭師」を公演しました。公演は本学が日頃から「室内楽の楽しみ」や「ポピュラークラシックコンサート」等でお世話になっている長久手市文化の家とパティオ池鯉鮒(知立市文化会館)で行われました。

舞台美術デザインを担当したのは、大学院美術研究科の「複合芸術研究」(オペラ)の学生と教員。装飾を施した複数

## 愛知県立芸術大学オペラ公演2019

のワゴンを巧みに配置し、市長邸の庭園、森の中や裁判のシーンなどを構成しました。大学院音楽研究科の「オペラ総合演習」の教員による指揮、演出や音楽指導、履修学生によるキャストとしての演唱や稽古ピアノとしての働き、本学管弦楽団、合唱団等、多くの力が結集。客席からの笑い、盛大な拍手やブラボの掛け声が公演の成功を物語っていました。

文・初鹿野剛(音楽専攻准教授)



ブッフホルツ氏 定期演奏会への出演

ワークシヨップや公開レッスン等のプログラムは、多様な文化や芸術に触れる機会となりました。教員や学生と交流を深めることにより、研究教育の場としての成熟に繋がりました。

メディア映像専攻は、これまでの芸術の枠を超えて、分野・領域にとらわれず柔軟に横断する研究アプローチと教育を実践し、新しいメディア映像表現を開拓することによって地域の文化向上と産業振興に寄与する人材育成を目指します。

デジタルアート&エンタテインメントデザインとしてのメディア企画、アドバタイジングデザイン、メディアアート、デジタルアーカイブ、メディア映像文化研究など、新時代のアクティビティの多様性を学びます。

2022年に大学の魅力ある専攻がまたひとつ増えることとなります。

## 2022年4月に美術学部デザイン・工芸科にメディア映像専攻が誕生します

2019年度のアーティストインレジデンスでは、2名のアーティストを招聘しました。美術分野では学外公募により採択された大崎晴地氏(美術家、10月〜11月)を招聘し、ワークシヨップやトークイベント、展示会を開催しました。音楽分野ではマティアス・ブッフホルツ氏(ヴァイオラ奏者ケルン音楽大学教授、11月)を招聘し、「中村桃子基金研究助成事業 弦楽器コース教授陣によるコンサート ケルンの風VI」(愛知県立芸術大学管弦楽団第30回定期演奏会)への出演および公開レッスンを実施しました。

デジタルアートとエンタテインメントデザインとしてのメディア企画、アドバタイジングデザイン、メディアアート、デジタルアーカイブ、メディア映像文化研究など、新時代のアクティビティの多様性を学びます。

## アーティスト・イン・レジデンス2019



photo by kana sonoda



夏のアカデミー2019への本学からの出品者

推薦部門	小西祐矢	博士前期課程	デザイン領域 1年
	塚田菜生	博士前期課程	彫刻領域 修了
	木下雄二	博士前期課程	油画・版画領域 修了
応募部門	中田泰花	美術学部	油画専攻 4年

あいちトリエンナーレの芸術大学連携企画として、コンテンポラリーダンサー(倉知可英)、音楽家(SKANK/スカンク)、版画家(倉地比沙支)の異色のセッションである展示とパフォーマンス「Unprepared」無交差」が開催されました。美術の表現も多様化した現在、ジャンルの境界は溶解しています。交流や交差を逆説的に捉えたパフォーマンスが行われました。

また服部浩之氏(アートラボディレクター)による企画「U27プロフェッショナル育成講座 夏のアカデミー2019」(2022年宇宙の旅)が開催されました。本プログラムは、共同作業を通じて、27歳以下の若い表現者たちが3大学を超えたネットワークを築き、将来的に愛知を拠点として活躍できる土壌作りを目的として企画されました。

文・倉地比沙支(芸術資料館長)



31,592人。これは今回の芸術祭におけるMEG I HOUSE SEへの公式来訪者数であり、前回は約10,000人上回るものです。この数値に対する評価は別として、春夏秋、合計100日間の会期中、MEG I HOUSEは1日平均315,922人の来訪を受け続けたことになりました。「開館時間中、85秒」と来訪者があることを意味します」と説明すれば、この数値の大きさを実感頂けるでしょうか。第1回から数えて4回目の今回、私たちは「週末はMEG I HOUSE」をコンセプトに、装い新たなMEG I HOUSEの公開と、2つのワークショップからなる11の企画を実施いたしました。

フェリーボートと共に寄せては返す人の波。人間の対流が瀬戸内の島々に生み出す喧騒と静寂。香川県高松市の沖合4kmに浮かぶ女木島の、オオテと呼ばれる石垣を持つMEG I HOUSEを舞台に、愛知県立芸術大学瀬戸内アートプロジェクトに期待される、音楽と美術が高度に融合した、自由かつ多彩な表現、パフォーマンスを、今回も十二分に堪能して頂けたと確信しています。

文・神田每実(彫刻専攻教授)

## サテライトギャラリー S・KURARAの開廊に寄せて

2019年6月、愛知県美術館に隣接した名古屋市東区東桜に、サテライトギャラリー S・KURARAが開廊されました。これは、本学の優れた研究や教育の成果を、展覧会や発表を通して、芸術・教育関係者はさることながら、広く一般にもアピールする新たな大学の発信拠点として位置付けられたものです。開廊記念として、藤田嗣治や横山大観などの本学収蔵作品と将来を担

う美術学部の若手中堅教員による合同企画「RANGE」(ここから、これから)が開催されました。ギャラリー名である S・KURARAは、親しみやすい「桜」や地名である東桜の二文字を入れることで、地域や社会と連携し大学の資産である幅のある表現や研究が、未来に向けて開花し羽ばたいていく意図が込められています。

文・倉地比沙支(芸術資料館長)

## アートラボあいちでの連携活動

## 瀬戸内国際芸術祭2019 愛知県立芸術大学瀬戸内アートプロジェクト 週末はMEG I HOUSE

## 在学生・卒業生の昨年の主なニュース

期間：平成31年1月から令和元年12月まで

※卒業・修了年は年度で記載しています。

### 美術学部/美術研究科

専攻	氏名	学年・卒年	展覧会・コンクール名等	受賞名
油画・版画	須貝 旭	博後 3年	AGA LAB レジデンスプログラム	参加
	都築 遼子	2018 修了	3331 ART FAIR 2019	出展
	小林 彩乃	2018 修了	3331 ART FAIR 2019	出展
	野田 千晴	博前 1年	3331 ART FAIR 2019	出展
	浦野 貴織	博前 1年	3331 ART FAIR 2019	出展
	角谷 友里恵	博前 1年	神山財団芸術支援プログラム	奨学生
油画	田口 薫	2018 卒業	3331 ART FAIR 2019	出展
	辻 蔭成	2018 修了	3331 ART FAIR 2019	出展
彫刻	高木 鈴香	学部 4年	第70回全国植樹祭あいち2019	おもてなし広場 花壇制作
	細川 和音	学部 4年	第70回全国植樹祭あいち2019	おもてなし広場 花壇制作
デザイン	細川 和音	学部 4年	第40回龍富士美術賞	優秀賞
	高田 颯平	学部 3年	日本学生BtoB新聞広告大賞	審査員特別賞
	石原 菜由子	博前 2年	第14回CBC翔け!二十歳の記憶展	審査員特別賞
	渡邊 泰成	学部 3年	第10回セントラルサムホール 絵画展	ラファエル賞
陶磁	渡邊 泰成	学部 3年	ヤングアーティスト公募展 「いい芽ふくら芽2019」	入選

### 音楽学部/音楽研究科

専攻	氏名	学年・卒年	展覧会・コンクール名等	受賞名
作曲	兒玉 苑香	2016 修了	いきいき茨城ゆめ国体 公式イメージソングおよび 総合開会式、閉会式典音楽	作詞・作曲
	兒玉 苑香	2016 修了	第10回日本管打・吹奏楽学会作曲賞	作曲賞(第1位)
声楽	石原 まりあ	2013 修了	PMFヴォーカル・アカデミー・オーディション	合格
	田浦 彩夏	2015 修了	第21回日本演奏家コンクール 声楽部門本選	一般Aの部1位、神奈川県教育委員会教育長賞、ハンナ賞
小林 美咲	2016 修了	ベルリン放送合唱団 スコアプログラム	オーディション合格、プロジェクト参加	
	川越 未晴	2017 修了	第21回日本演奏家コンクール 声楽部門本選	一般Aの部3位、名古屋 市教育委員会賞
岩田 健豊	博前 2年	第25回みえ音楽コンクール 声楽部門本選	大学生・大学院生の部 第3位	
	竹内 穂乃香	博前 2年	第70回全国植樹祭あいち2019	エビローグアトラクション 演奏
水野 亜美	博前 2年	第24回KOBÉ国際音楽コンクール	奨励賞	
	山下 千愛	博前 2年	大阪中央ロータリークラブ創立 35周年記念音楽コンクール	入選
山下 千愛	博前 2年	第24回KOBÉ国際音楽コンクール	声楽C部門 最優秀賞、兵庫県教育委員会賞	
	山下 千愛	博前 2年	第18回北陸新人登壇門コンサート	出演
山下 千愛	博前 2年	第21回日本演奏家コンクール 声楽部門本選	一般Aの部 奨励賞	
	市野 梨沙	博前 1年	第73回全日本学生音楽コンクール 名古屋大会	声楽部門 大学の部 第1位
市野 梨沙	博前 1年	第73回全日本学生音楽コンクール 全国大会	声楽部門 大学の部 入選	
	加藤 美穂	博前 1年	第25回みえ音楽コンクール 声楽部門本選	大学生・大学院生の部 第2位
成田 朋加	博前 1年	第11回東京国際声楽コンクール 歌曲部門本選	第5位	
	東原 由貴	学部 4年	第11回東京国際声楽コンクール 大学生部門本選	奨励賞
東原 由貴	学部 4年	第49回フランス音楽コンクール 声楽部門本選	第1位、毎日放送賞、稲畑賞	
	中畑 友里	学部 4年	第25回みえ音楽コンクール 声楽部門本選	大学生・大学院生の部 奨励賞
中畑 友里	学部 4年	桑名西ロータリークラブ第32回 新進音楽家奨励賞	奨励賞	
	遠藤 更	学部 3年	第73回全日本学生音楽コンクール 名古屋大会	声楽部門 大学の部入選
遠藤 更	学部 3年	第29回日本クラシック音楽コンクール	声楽部門 大学女子の部 第5位(部内最高位)	
	土井 里佳子	学部 3年	2019年ウィーン国際音楽セミナー ヨーゼフ・ディヒラーコンクール	第3位
中村 清美	学部 3年	第11回東京国際声楽コンクール 大学生部門本選	入選	
	吉川 紗良	学部 3年	2019年ウィーン国際音楽セミナー ヨーゼフ・ディヒラーコンクール	第3位
鍵盤楽器	鈴木 美穂	博後 1年	NHK-FM「リサイタル・パッショ」	メディア出演

### 専攻

氏名	学年・卒年	展覧会・コンクール名等	受賞名	
大崎 侘々	2018 修了	第9回神戸芸術センター記念 ピアノコンクール	銀賞	
古川 絢瑛	博前 2年	第35回JPTAピアノ・オーディション地区予選	奨励賞	
古川 絢瑛	博前 2年	第5回なごや青少年 ピアノコンクール本選	第3位、愛知県教育委員会賞	
古川 絢瑛	博前 2年	第6回刈谷国際音楽コンクール	ピアノ部門 一般の部 奨励賞	
古川 絢瑛	博前 2年	第31回ムーシケピアノコンクール	第6部門 金賞	
古川 絢瑛	博前 2年	第64回県下ピアノ独奏コンクール	第1位、最優秀賞、愛知県 知事賞	
古川 絢瑛	博前 2年	第7回あおによし音楽コンクール奈良 プロフェッショナルステージ	第3位	
眞鍋 杏梨	博前 2年	ニース国際ピアノコンクール	ディプロマ部門第1位	
天野 穂乃香	学部 4年	第29回日本クラシック音楽コンクール	ピアノ部門 大学女子の部 全国大会第4位	
山下 響	学部 4年	公益財団法人びわ湖芸術文化財団主催 ザ・ファーストリサイタル2020出演者オーディション	合格 滋賀県芸術文化祭 奨励賞	
光行 彩香	学部 2年	第1回 あいの土山ピアノコンクール	演奏家コース 大学生 一般部門 第1位	
稲垣 真結	学部 1年	第21回 日本演奏家コンクール	ピアノ部門 大学生の部 奨励賞	
山田 ありあ	学部 1年	ピティナ・ピアノコンペティション	ソロ部門G級 ベスト5賞	
吉岡 瑞貴	学部 1年	第13回ベアテン音楽コンクール 中部地区本選	自由曲コース 大学・院生 Aの部 最優秀賞	
吉岡 瑞貴	学部 1年	第31回愛知県尾東音楽コンクール	ピアノ部門F 銀賞	
吉岡 瑞貴	学部 1年	第21回ショパン国際ピアノコンクールinAsia 地区大会	大学生部門 銀賞	
吉岡 瑞貴	学部 1年	第6回 東京国際ピアノコンクール	大学生部門 審査員賞	
清水 綾	2016 修了	中部フィルハーモニー交響楽団	団員(ヴァイオリン)	
酒井 愛里	2014 修了	名古屋フィルハーモニー交響楽団	入団(ヴァイオリン)	
奥田 敏康	2012 修了	兵庫芸術文化センター管弦楽団	団員(コントラバス)	
高田 知子	2012 修了	第71回福井県音楽コンクール	知事賞	
高田 知子	2012 修了	公益財団法人 愛銀教育文化財団(愛知銀行) 令和元年度 助成金	受賞	
岡本 紗季	博前 2年	第12回ベアテン音楽コンクール	自由曲コース 弦楽器部門 大学・院生Aの部 第3位	
山内 佑太	博前 2年	第21回日本演奏家コンクール	一般Aの部 特別賞	
水野 繪	2018 卒業	兵庫芸術文化センター管弦楽団	入団(ヴァイオリン)	
太田 咲耶	2015 卒業	第31回日本ハープコンクール2019	プロフェッショナル部門 第3位	
尾高 詩音里	2012 卒業	名古屋フィルハーモニー交響楽団	入団(ヴァイオリン)	
橋本 歩	2011 卒業	兵庫芸術文化センター管弦楽団	団員(ヴィオラ)	
樹神 有紀	2011 卒業	ポリ シンフォニエック	副首席 ヴィオラ奏者就任	
長谷川 彰子	2007 卒業	新日本フィルハーモニー交響楽団	首席奏者(チェロ)	
米田 誠一	2006 卒業	名古屋フィルハーモニー交響楽団	アシスタントコンサート マスター就任	
高橋 美香	学部 4年	第59回国際芸術連盟新人オーディション	弦楽器部門合格、審査員 特別賞	
黒川 真洋	学部 4年	小澤征爾音楽塾オペラプロジェクトXVII ROHM CLASSIC SPECIAL	オーケストラメンバー 合格	
大堀 はな	学部 3年			
岡田 直人	学部 3年			
若林 めぐみ	学部 3年	第13回セシリア国際音楽コンクール	室内楽部門 第3位	
稲田 悠佑	学部 3年			
飯田 桐乃	学部 3年			
小関 杏奈	学部 3年	第13回セシリア国際音楽コンクール	室内楽部門 第3位	
若林 めぐみ	学部 3年	市川市文化振興財団 第32回新人演奏家コンクール	弦楽器部門 優秀賞	
重森 捺音	学部 2年	全日本ジュニアクラシック音楽コンクール	第2位	
梅村 直弥	学部 2年	第29回日本クラシック音楽コンクール	コントラバス部門 大学の部 全国大会第5位	
猪子 奈津子	学部 1年	小澤征爾音楽塾オペラプロジェクトXVIII ROHM CLASSIC SPECIAL J・シュトラウス II世 喜歌劇「こもり」	オーディション合格	
打楽器	飯島 虹虹	博前 2年	第70回全国植樹祭あいち2019	エビローグアトラクション 演奏
管打楽器	世良 法之	2016 卒業	PMF2019オーケストラアカデミーオーディション	合格
	松本 貴美子	2018 卒業	第3回名古屋トロンボーンコンペティション	一般ソロ部門 第2位
高田 和響	2018 卒業	第3回名古屋トロンボーンコンペティション	審査員特別賞	
	青山 夏大	学部 4年	Leonald Falcone International Euphonium and Tuba Festival	Euphonium Artist 第3位
岩石 茉奈	学部 4年	新進演奏家育成プロジェクトオーケストラ シリーズオーディション(名古屋)	合格	
	渡邊 偉大	学部 4年	第70回全国植樹祭あいち2019	エビローグアトラクション 演奏
野本 淳之亮	学部 3年	小澤征爾音楽塾オペラプロジェクトXVIII ROHM CLASSIC SPECIAL J・シュトラウス II世 喜歌劇「こもり」	オーディション合格	
	荻原 瑠惟	学部 3年	第70回全国植樹祭あいち2019	エビローグアトラクション 演奏
石垣 みどり	学部 2年	第22回「長江杯」国際音楽コンクール	アンサンブル部門 一般の部A 第2位	
	石垣 みどり	学部 2年	第5回刈谷国際音楽コンクール	フルート部門 一般の部 奨励賞
秋口 響哉	学部 2年	第3回名古屋トロンボーンコンペティション	一般ソロ部門 第1位	
	岩間 美奈	学部 2年	第70回全国植樹祭あいち2019	エビローグアトラクション 演奏
加藤 菜々穂	学部 2年	第70回全国植樹祭あいち2019	エビローグアトラクション 演奏	

